

中林賢二郎教授を偲ぶ

田 沼 肇

中林賢二郎さんのヒューマンで上品な人柄、反面、きびしい経験をとおして鍛えられた剛直な生き方については、多くの人びとによって語りつがれていくことだろう。私も、中林さんの身近かにいた後輩のひとりとして、そのような故人の存在を忘れることはない。

また、中林さんの研究者としての業績——『世界労働運動の歴史』、『労働運動と統一戦線』、『統一戦線史序説』および『現代労働組合組織論』などの労作に代表される——は、学界において、その高い評価が消えることはないであろうし、なによりも、わが国の労働運動にたいして、影響をおよぼしつづけるにちがいない。こうしたなかで、私も、中林さんらとの共著『戦後日本の労働組合運動』をもっていることに、残されたものとしての厳粛な責任を感じる。

中林さんの最後の大きな仕事となったのは、『日本の労働組合運動』全五巻（大月書店刊）の共同編集であった。かれは、一九六〇年代から七〇年代へかけて、堀江正規責任編集『労働組合運動の理論』の執筆に参加したときにもまして、この仕事に心血をそそいだ。とくに、第五巻に収められている巻頭論文「企業別組合と現代労働組合運動の組織論的課題」は、中林さんの、研究者としての「遺言」ともいうべきものであろう。中林さんと同世代のもの、また中林さんによって育てられてきた後継者たちに、「遺言」の理論的展開が期待されている。

さらに、中林さんは、生活全般において、国際人であった。その視野の広さは、留学中に書いた『イギリス通信』などの好著に示唆されている。同時に、中林さんは、法政大学社会学部長として、困難な条件が山積していたにもかかわらず、りっぱに職責をはたされたことも、強調しておかなければならない。

それにしても、中林さんの生涯を貫く人間性は、なんであったのだろうか。これは、かれを尊敬する私にとっても、少なからぬ関心事であった。今回、思いもかけず、中林さんの追悼文集を同僚たちと編纂することになり、中林夫人から、かれの自筆の「敗戦日誌」を提供され、私も一読、深い感銘を覚えた。

「敗戦日誌」は、ノートにこまかい文字で綴られており、太平洋戦争末期の一九四五年四月一日から、敗戦直後の同年八月三〇日ころまで、とびとびの日付で誌されている。それは、中林さんが大学を卒業し、東亜研究所に勤務するようになって半年、しだいに激しくなる空襲のもとで書かれたノートであった。そこには、当時としては稀にしかみられない、すぐれた見識が、静かに、しかし断固として、述べられている。

「われわれは、この戦局の中で、毎日恐ろしいことを考へてゐる。この戦局の中で、われわれは、もはや現在抗戦しつつある日本を信じてゐないのだ。勿論、勝つことを欲してはゐる。然し、勝てぬと信じてゐるのだ。そして、何等かの形——抗戦以外の——でこの危機を脱出する方法を考へるか、或は、敗戦の後に立上るべき新しい日本への期待を語りつつあるのだ。これは確かに恐ろしいことだ。」（一九四五年四月一日付）

「併し、この抗戦日本を信じないにも拘らず、この抗戦勢力にひきづられて、何等、新しい一步を踏み出さうとしてゐないといふことに比べれば、この恐ろしさも、実は大したことはないのだ。」（同右）

中林さんによれば、「思想の怠惰」、「思考と実行の分離」こそ、「一番恐ろしいもの」なのである。まだ、二〇歳台

なかばであった中林さんの面目躍如たるものがあり、亡くなるまで貫いた、かれの人間性の根幹が、すでに形成されていたことを知る。

一方、予科練を志願させられたような少年たちへの中林さんの目差しは暖い。後の教育者としてのかれの確信が、芽生えていくようだ。「敗戦日誌」には、こう書いてある。

「封建勢力の最中で育てられ、militarismに育てられた、現代の少年達は、果して新しい日本の担当者たり得るであらうか、との疑問は生ずるであらう。……が、この疑問は、この不安は、捨てられてよい。少年はもっと信じられてよいのだ。例へ彼等が、militarismに育てられ、一時的に予科練として立たうとも、彼等は心の隅の何処かで、そこに含まれた不純さを見抜いているのだ。勿論彼等はこれを意識し、これを発展することは出来ぬであらうが、この不純さを感じ取った彼等の心は、彼等の無意識下に、漸次育って行き、何時かは花と咲くのだ。」(同右)

中林さんは、戦禍のもとでも、自分自身にたいしては、研究のスケジュールを厳格に課していた。「家で」、「電車の中で」と、翻訳や読書の日課を組んでいたことが、「敗戦日誌」に書かれている。一九四五年五月に入ると、中林さんの研究も、思うにまかせぬようになってきたのであろう。「この頃の思想的貧困は蔽うべくもない」と痛切な気持ちで述べられている。五月三十一日付、「再出発！ これあるのみだ。」

中林さんは、「敗戦日誌」のなかで、先に引用したとおり、「勿論、勝つことを欲してはゐる」と述べたりしている。また、戦況についても、たとえば四月一八日付、「一昨日頃から、沖縄戦で相当航空母艦を沈めてゐる。四月一五日の夜間空襲で敵の失ったB29の数は七〇機にのぼる」など、軍の発表をうのみにさせられているような点も、ないわけではない。だが、当時の制約を考慮すると、そういう点があつて不思議ではない、というべきだろう。むしろ、

「敗戦日誌」をみると、中林さんが、国際的な情勢には、戦時中からひじょうに敏感であったことが注目される。

「今年いっぱいには戦争は終るだらう。ドイツは今月中に終ると思ふ。日本はどうするか。」——戦況を軍の発表どおりに書いた同じ四月一八日付に、こう述べている。中林さんの戦争全体にたいする見透しは、ドイツの降伏予想が一カ月ほど早すぎただけで、正確だ。

日本の降伏とともに、中林さんの新しい生活がはじまる。八月一五日付の「敗戦日誌」には、つぎのように誌されている。

「日本はポツダム宣言を受諾した。一二時、遂に天皇陛下自ら、この和平条件受諾の詔書を放送されたのだ。空は晴れてゐた。人々は黙々としてゐた。昭和一六年一二月八日、丁度あの開戦の当日の様だった。然しあの時よりも、何かしら矢張り開放感があった。それが人々の間に感ぜられた。事實は解放ではなかったのではあらうが。軍部に代って、日本人ではない、多くの外国人の束縛が、我々の上に落ちて来たのであるが。」

ここにごく一部を紹介した「敗戦日誌」は、若干の省略はあるが、中林さんの追悼文集に収録されることになっている。また、中林さんについての多面的な追憶も、同じ文集にもりこまれている。したがって、あとは、すべてをそちらへゆずることにしたい。

私は、中林夫人とも、大原社会問題研究所で、長いあいだいっしょに働いてきた。賢二郎さんを亡くされた悲しみは、いかばかりかと思い、胸がしめつけられる。どうか、ご自分をたいせつに。賢二郎さんの分まで、充実して生きてほしい。